

『徒然草』の注釈書『徒然草寿命院抄』[PDF版]

『徒然草』について

『徒然草』は、上下二巻の随筆で、著者は、「卜部兼好」即ち兼好法師、吉田兼好と記述される人物である。書名の表記法も『つれづれ草』『つれづれ種』『冷然草』と表記されたり一様ではない。成立年代は一三三三年とするが、実は明確な根拠とする資料はないのが現況であろう。国語学的にこの文献資料を見るに、兼好自身が培った和文脈と漢文脈とを縦横自在に駆使した個性溢れる美意識な世界観や人間観をこの作品中に生み出している。

最古の古写本は、正徹自筆本〔静嘉堂文庫蔵〕で、上巻に「永享三年三月二十七日」、下巻に「永享三年卯月十二日」の奥書のある書が知られている。また、流布本の代表としては、烏丸光弘本があり、「慶長癸丑(十八年)一六一三」仲秋日、黄門光弘の奥書のある古活字板がこれにあたる。他古写本としては、東常縁筆の常縁本(室町時代写、上巻村田順蔵、下巻吉田幸一蔵)や傳細川幽斎筆本〔慶長頃写、吉田幸一蔵〕が知られている。

『徒然草』の古注釈

1, 『徒然時勢粧』(つれづれいま)七巻六冊。浮世草子。錦文流作。自序。享保六年(一七二二)正月、大坂野村長兵衛刊。【翻刻】浮世草子4

2, 『つれづれ草』(つれづれ)五段。浄瑠璃。宇治加賀掾正本。【翻刻】近松全集1

3, 『徒然草寿命院抄』(つれづれぐさじゆ)二巻二冊。寿命院立安(秦宗巴)著。也足叟素然(中院通勝)跋。慶長九年(一六〇四)京都如庵宗乾刊。秦宗巴(一五五〇—一六〇七)は、和漢の学に通じた仮名草子作者であり、本業は醫師(下巻奥書に「此抄者壽命院立安法印院凌醫家救療之暇廣見遠聞而漸終篇予披覽最奇之餘揮短毫聊録事状耳」と記載)であったという。本書が『徒然草』の最初の注釈書とする。典拠資料は、百数十種に及ぶ(※書名は以下の段に示す)。片仮名交じりの古活字版としても慶長八年刊行の『太平記』に継ぐ古きものであり、出版文化の位置づけとしても重要な書物といえよう。

4, 『徒然草諸抄大成』(つれづれぐさしよ)二十巻。浅香山井著。貞享五年(一六八八)五月、京都武村新兵衛ら四書肆刊行。凡例に『徒然草寿命院抄』から『徒然草大全』『徒然草参考』至る十三種の旧抄の諸説に、聞書き・自案を加え、一本で諸抄の注解を見る「ことに努めた注解集書である。山井は、加賀前田家綱紀に仕え、国史・国文・神道に通じていた。

5, 『徒然草文段抄』(つれづれぐさち)七巻。北村季吟著。寛文七年(一六六七)十二月初刊。歌学者とし

て『徒然草』觀を提示し、松永貞徳同門下である加藤磐齋の説を引くことが少ない。

6, 『徒然晬が川』(つれづれのしがわ)五卷五冊。洒落本。艶好法師(晬「粹」川子、西村定雅)作、耳鳥齋画。
漱石(俳人)序。天明三年(一七八三)正月刊。大坂塩屋喜助・京都吉野屋勘兵衛・小幡宗左衛門板。【翻刻】洒落本大成12。

7, 『つれづれの讚』(つれづれののさん)九卷九冊。支考著。自序。宝永八年(一七一)自跋(門人、渡内部狂：支考の変名)。京都柏屋勘右衛門・柏屋勘九郎刊。他に風月五郎左衛門・小川久兵衛刊の八卷八冊本がある。自序に元禄七年(一六九四)二月彼岸の日に起筆するとある。

8, 廣小路家傳來『徒然草私註』十二冊。徒然草講釈の聞書き。事物風習を近世の現況と故実や古歌に比較して説明するなど、刊本の注釈書類にない視点が見える。作品の享受の実態を記録し、風俗史・國語學資料としての魅力ある資料。

9, その他。『野槌』(一六二)年、林羅山。『目覚草』寛永二年(一六二五)跋、傳鳥丸光廣。『鉄槌』(一六四八)年、青木宗胡。『徒然草古今大意』(一六五八)年、大和田気求。等が知られている。

『徒然草寿命院抄』を読む

一作意ハ老佛ヲ本トノ無常ヲ觀シ名聞ヲ離レ専ラ無爲ヲ樂ン事ヲ勸メ傍ラ節序ノ風景ヲ翫ヒ物ノ情ヲ

知ラシムル者乎

卜部系圖 不平等

○大織冠鎌足―意美磨―清磨―諸魚―智治磨―日良磨―豐宗―好具―兼延―兼忠―兼親―兼政―兼俊
―兼康―兼貞―兼茂―兼名―兼顯

兼好

兼直―兼藤

―兼益―兼夏―兼豐―兼瀨―兼敦―兼富―兼名―兼俱―兼致―兼滿―兼右―兼見

一つれ／＼なるまゝに・日くらし硯にむかひて・心にうつろゆくよしなしことをそこはかとなく書つくれば・あやしうこそ物くるをしけれ・

此マテハ・此草子ノ序分也・序トハアマタノ義アレトモ。緒也・廊也トテ蠶ノイトクチ又ハ堂ヘ入テマツ廊ヘ入ル如ク・其ノ書ヘ入ノ端ナリ・編集ノ心ヲ・慨略ノアラハスヲ云也・外アマタノ義アリ

一つれ／＼草トハ・発端ノ辞ヲ以テ題号トスル也・然モ此草子一部ノ心ナリ

つれ／＼トハ・サビシキ也・草トハ・カコチグサワラヒ草ナト云類也・ツレツレノモチアツカヒ草也

日くらしトハ終日也 日くらしに山路のきのふ時雨しハ富士乃高ねの雪にそありけり

硯にむかふ 何となく硯にむかふ手習よ人にいふへきおもひならねは 風雅集二

心にうつりゆくトハ・ウツリ來ル也・心ハ鏡ノ如ク万境ウツリ來ルト云古來ノ本説アリ・

よしなし事トハ・由來モナキムサトシタル事也・
そこはかとなくとはソコトモナク也・はかハ付字也・

神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物そかなしき
物くるをしけれどハ・物グルワシケレト云也謙退ノ辞也・

このように仮名文字で本文を記載した後に、片仮名と漢字で注釈を施し、引用する和歌は仮名表記を原則としている。文の区切り記号として「・」符号が使用されています。現代の漢字熟語と異なる熟語「序分(序文)」「概略(概略)」「謙退(倦怠)」の三語があります。此等にはふりがなは付していません。片仮名語としては、「モチアツカヒ」即ち、「文字扱ひ」の意。「カコチグサワラヒ草」は「託種・蕨草」となります。典拠資料は、『源氏物語』『枕草紙』『撰集抄』『八雲抄』『論語』『河海集』『事文類聚』『尚書』『遊仙窟』『禁秘抄』『九條殿遺戒』『和名集(倭名類聚抄)』『遊心集』『大鏡』『(聖徳太子)太子傳』『莊子』『白氏文集』『元亨釋書』『日本記』『水鏡』『井蛙抄』『獨樂園記』『文選』『白氏長慶集』『老子經』『古今集』『新古今集』『梁塵秘抄』『公事根源』『蒙求』『歳時記』『後撰集』『風土記』『璫囊鈔』『名目抄』『延喜式』『花鳥(余情)』『一葉抄』『長恨歌』『萬葉集』『榮花物語』『拾芥抄』『本草海藥』『本草■經』『古文真寶』『大智度論』『選擇集』『伊勢物語』『仁王經』『毛詩』『瑣碎録』『吾妻鏡』『海道記』『神皇正統記』『藻塩草』『本生心地觀經』『法華經』『平家物語』『假名文字遣』『續古今集』『世説(新語)』『古事談』『源語類聚』『豫章文集』『(摩訶)止觀』Ⅱ『天台止觀』『愚問賢注』『大學』『法顯傳』『淮南子』『楊子法言』『(和漢)朗詠(集)』『説苑』『相中記』『書言故事』『勻會』『通書大全』『長曆』『韻府(群玉)』『本草(和名)』『精進魚類(草子)』『玉篇』『六書音義』『手鑑』Ⅱ『龍龕手鑑』『沙石集』『太平記』『大明一統志』『下繫辞』『韓文』『禮部(韻略)』『事林廣

記』『排韻』『居家必用』『小學』『帝範』『三國史』『涅槃經』『左傳』／『下學集』『千載集』『孟子』『前漢書』『大日經』『明堂灸經』『玉葉集』『公卿補任』『葳乘法數』『楚歲時記』『廣匀』『直音』『梵網經』『晉書』『言行録』『本草衍義』『無名抄』『玉造小野子壯衰書』『平家勘文』『年中行事』『金剛經』『讚岐典侍日記』『北山抄』『西宮記』『政事要略』『西域記』『職源抄』『通監(資治通鑑)』『聖濟總録』『豊築後統秋』『首楞嚴經』『十八史略』『臨濟録』『性理大全』『遺教經』『釋氏要覽』『太法鼓經』『報恩經』『起心論』『華嚴經』(※重複書名は初出のみ記載した)等の内外の書名が記載されその文言引用されています。此外「醫書二」「或抄二」といった典拠書名を明確に示さない注解説明の箇所も見えています。また、書名を列挙して説明する「謝靈運トハ『内典録』『曆代實記』『開元釋教録』『貞元録』等ニモ不載之也」や『史記』『漢書』『文書』等ノ類也」と云った記載方法も見えています。

此書を覆製刊行し、解説を加えた川瀬一馬氏は、この書物のなかで、「殊に論語集解を以て注解を施してゐる一方、性理大全などを引用してゐるのは注意す可き事であると思ふ。佛書、醫書に至つては、著者の最も得意とする處であつて、其の引用注解も親切を極めてゐる。」〔解説11⑩〕と指摘するところだす。

次にこの書物で國語學(特に古辞書研究からの)の注目する箇所を記しておきます。

まず、古辞書として『和名集』は、源順『倭名類聚抄』からの引用です。此については時間が許せば調査報告します。ここで室町時代に本邦で編纂された古辞書類について絞つて見ますが、『下學集』(下巻のみ三例)と『璫囊鈔』(上下巻に引用)の二種が引用の書物として引用されています。此等以外の『節用集』類などの古辞書が引用されていないことも留意しておきたい事柄でしょう。このことを踏まえて、上記二種の古辞書引用箇所を分析しておきます。

1、『下學集』からの引用

一クスタマ 樂玉五月五日小兒ノ袖ニ懸レ之以ニ五色ノ彩ヲ一作之爲攘惡鬼也。又名「長命縷」。又曰「續命縷」。見于下學集」。〔下卷五才⑦〕

〔典拠本文〕

藥玉 五月五日小兒ノ之袖ニ之ヲ付ク 以テ五色ノ絲ヲ作レレ之ヲ 爲レ攘ニ惡鬼ヲ一 又名クニ長命縷ト一 又曰ニ續命縷トモ一也云々〔器財門 110⑥〕

一魚道也・魚ハ同シ道ヲトフル物也ト云説アリ・サルホトニ・口ノアタリタル所ヲ・又酒ヲトヲシ・ス、ギ捨ルト云理カ魚道ノ本文未考之・／下學集云・魚道者建ニ殘盃ヲ也・以ニ餘瀝ニ洗レ盃痕ヲ喻之魚過ニ舊道故云ニ魚道ト也・魚雖游ニ泳大海・終不レ忘ニ旧道ヲ者之・是又出所未詳也・〔下卷 20才③〕

〔典拠本文〕

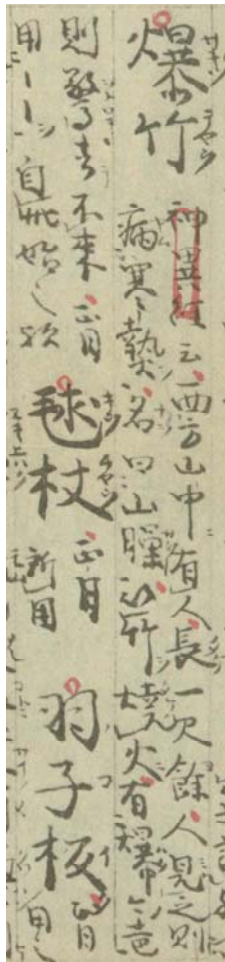
魚道 魚道者建ニ殘盃ヲ器也 以テニ餘瀝ヲ洗ニ杯痕ヲ 喻ニ之ヲ魚ノ過ニ旧道フルキミチヲ 故ニ云フニ魚道ト也 魚雖トモ游ニ泳ニ大海ニ不レ忘レニ旧道ヲ者也〔熊藝門 82⑥〕

四十四 サキ丁ハ正月・イ本ニ・三毬打トアリ・

爆竹 神異經曰・西方ノ山中ニ有ニ長一尺ノ人也・諸人見レ之病ニ寒熱ヲ燒レ竹有レ聲則驚去不來・

左義長 一説曰白馬寺佛經ハ左ニ置・儒書ヲハ右ニ置試放火烧・左ノ佛經ハ不燒・故法成就也・東土哉云々ト喝也右之兩説・見于下學集本據・雖未考之・又以一説書之・〔下卷 35才⑩〕

〔典拠本文〕 村口本『下學集』〔古典叢書刊行会〕



爆竹 神異經云・西方山中ニ有レ人長一尺餘。人見レ之則病ニ寒熱ヲ一名ヲ曰ニ山臊ト以レ竹ヲ燒ハレ火ニ

有レ爆竹ノ声一則驚去不來ト。正月ニ用ニ一自レ此始也敷〔器財門〕

孰れも、『下學集』本文を精確に見て記載したものではないことがここで判明します。所々、省略改字して居ますので、元和版でも解決しがたい内容表示となっています。

「異名」について注解する箇所

一憂ヲワスルト・酒ノ異名ヲ忘憂君ト云〔下卷 31ウ④〕